

近況報告 ～4期生～

評議員からの一言

首里城下町クリニック院長

田 名 毅

「同窓生の皆さん、こんにちは。今回の南風の編集学年は四期生になっており、佐村博史、佐村博範両評議員と相談し、10名の同窓生に近況報告の原稿をお願いし書いていただきました。多くの同期生は卒業後会いたくてもなかなか会えない、もしくはゆっくり話す機会が少なくなっていますが、今回、皆こころよく書いてくれました。一人一人の思いがこもった、すばらしい内容になっています。是非ご一読下さい。」

卒業・上京後の活動報告

雷門メンタルクリニック 精神科 伊 波 真理雄

はじめに

4期生評議員の方々から、つたない自分の経験を報告できる機会をいただけたことを感謝します。

精神科クリニックでの臨床

東京の浅草で2000年2月に開業し、15年間で約6000人の利用がありました。内容は多種多様で、アルコールや薬物依存の他、ギャンブル、摂食障害、買い物などの浪費、万引き、くり返す性的犯罪などの相談も受けています。さらに今は発達障害やひきこもりに悩む人への医療・福祉的支援に力を注いでいます。

上記の多くはわが国の一般精神科外来で「専門外」とされてしまっていますが、行き場を失って孤独や疎外に苦しむ当事者と力を合わせ、出会いを探していくプロセスは案外楽しいものです。

地域活動

私と地域社会資源の連携スタイルは、わが国でもかなり珍しいのではないのでしょうか。クリニックの週4日半の勤務時間外に、定期的に保健センターなど15ヶ所の行政機関で事例検討や講義を行ない、さらに16の社会復帰施設の理事や嘱託医をしています。クリニック内の活動よりも、連携施設の関係者との飲み会が多過ぎるのが悩みです（苦笑）。

開業時、銀行からまったく出資してもらえなかった私は、飲み会のメンバーたちからのカンパに助けられましたので、応援して下さった皆さんの期待に報いたいものです。

研究・教育機関からの依頼、学会参加

琉球大学法医学教室におられた大野曜吉先生から

お声をかけていただき、日本医科大学の医事法学で「薬物依存」の講義を17年続けています。

また、厚生労働科学研究費補助金の障害者対策総合研究事業で、「病的ギャンブル（いわゆるギャンブル依存）」の概念の検討と各関連機関の適切な連携に関する研究」という分担班の発足から協力しています。

主にギャンブル問題に関する出版物や論文の依頼、都の精神科診療所協会や医師会などからの講演を引き受けていますが、学会は苦手でほとんどを退会してしまい、現在は成人軽度発達障害研究会のみです。

依存症とのかかわり

私は卒業2年目でアルコール依存治療に加わりましたが、その頃は飲酒をくり返す患者に怒りをこらえ躍起になって、相手を威圧したりなだめすかしたりの毎日でした。

そんな私は「外国行けばハクが付く」と目論み、米国での研修に参加しましたが、その初日に、「依存症からの回復はrespect and dignityを取り戻すことだ」と言われました。

それまで私がしていた、上から目線の断酒強制は、アルコールに尊厳を奪われ苦しんでいる人々への「虐待」ではなかったか、と愕然としました（さすがに泣きました）。

現在は「酒が要らない幸せな一日」を支援するため、慰めと励ましを通して「回復の喜び」を伝えていくサポーター活動をしています。

おわりに

これといった志も持たずに医師になった私ですが、spiritualityに満ちた回復プログラムと出会い、臨床観を根底から変えることができ、医師としてのシアワセを味わっています。きっとこれらは、何かの力がこの職業人生に与えてくれた大きなギフトだった